



(22×24)

## あくたれラルフ

ジャック・ガントス作

ニコール・ルーベル絵 石井桃子訳

童話館出版 1994年(アメリカ1976)

〈福音館書店 1982年〉

セイラのねこのラルフは、からだが真赤でぎよろ目のあくたれです。セイラの乗っているブランコの木の枝を切ったり、自転車で食堂にとびこんだり…。ある晩サーカスでも大暴れ。とうとう、そこに置きざりにされてしまいます。そして辛い目にあいます。こんなあくたれでもセイラはラルフが大好きです。思っきりカラフルで自由な絵が、ストーリーに合っていて、心をのびのびと開放してくれる絵本です。



(21×23)

## あまがさ

八島太郎文・絵

福音館書店 1963年(アメリカ1958)

モモはニューヨーク生まれの日本人の女の子。雨の朝、3歳の誕生日にもらった雨傘をさして通りに出ていきます。「わたし、おとなのひとつみたいに、まっすぐあるかなきゃ！」と一生懸命歩くモモ。初めて一人で雨の中を歩く子どもの緊張感と新鮮な喜び。大きくなったモモが忘れてしまったこの日のことを、娘の成長の証として心にとどめた作者の温かなまなざしが感じられます。重厚な中にも明るく透明感のある絵も不思議な魅力があります。



(24×26)

## ありがたいこってす！

マーゴット・ツェマック作 渡辺茂男訳  
 童話館出版 1994年（アメリカ1976）  
 〈ほるぷ出版1980年〉

むかしある村に、貧しい男が家族9人で、一部屋しかない小さな家に住んでいました。けんかばかりしていて、あんまりみじめなので、とうとう、村の賢者ラビに相談にいきます。ラビが授けてくれた解決策とは？…「ものは考えよう」ということわざを身をもって実感することになった家族。厳しい現実を笑い話にして生き抜いてきた、民族の知恵を語り継ぐユダヤの民話が、ツェマックの簡潔な文と巧みな絵によって、味わい深い絵本になっています。

いつもちくのおとこのこ  
 —ジョン・パトリック・  
 ノーマン・マクヘネシー



ジョン・バーニンガムさく たにかわしゆんたろうやく

(26×25)

## いつもちくのおとこのこ

ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー

ジョン・バーニンガム作 谷川俊太郎訳  
 あかね書房 1988年（アメリカ1987）

ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシーが学校に遅刻するのは、ワニやライオンや高潮に邪魔されるからです。でも先生は信じてくれず、もう嘘をつかないようにときつい罰。ところが、ジョンが珍しく学校に間に合うと、先生はゴリラにつかまって、屋根にいます。助けを求められたジョンは、先生に叱られた言葉をそのまま返して悠々と立ち去ります。もっとお勉強しに…。何とも痛快なナンセンスの世界。子どもたちは大喜びです。



(30×23)

## 海のおばけオーリー

マリー・ホール・エッツ文・絵 石井桃子訳  
岩波書店 1974年 (アメリカ1947)

オーリーはアザラシの赤ちゃんです。お母さんが沖に出て魚をとっている間に、水兵に連れ去られ水族館に入れられてしまいます。でも、飼育係は湖に放してくれました。ところが水の上に顔を出すとお化けに間違われ、町は大騒動になってしまいます。オーリーは泳ぎ続けながら、湖を横切り運河を通り抜け、お母さんのいる海に出ていきます。コマ割りされた絵は、昼間は白、夜は黒を基調としていて、オーリーの心情をよく表わしています。



(31×22)

## オオカミクン

グレゴワール・ソロタレフ作 堀内紅子訳  
ベネッセコーポレーション 1991年  
(フランス1989)

オオカミとウサギは、大の仲良しです。二匹はお互いをよく知らないまま出会いました。ある日、「おおかみがこわいごっこ」で遊んでいる時に、ウサギはオオカミの本当の怖さを知り、自分の穴にとじこもってしまいます。がっかりしたオオカミは旅に出ますが、途中でウサギに間違われ、食べられる恐怖を体験します。気持ちを分かりあえた二匹は、再び仲良しに戻ります。黒い線でくっきりと縁取りされた絵が、力強さを感じさせます。

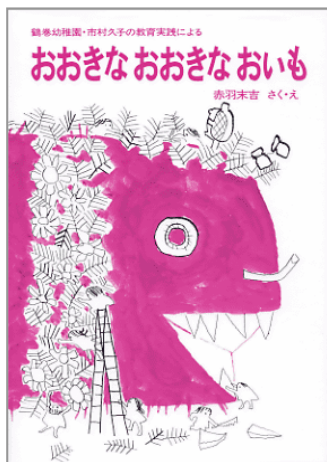


(27×20)

## おおきくなりすぎたくま

リンド・ワード文・画 渡辺茂男訳  
ほるぶ出版 1985年(7月) 1952)

熊の毛皮を手に入れようと、農場の少年ジョニーは鉄砲を持って森へ行きました。でも、出会ったのはお腹をすかせた子熊。家で飼われることになった子熊は成長し、やがてよその畑や納屋を荒らすようになります。父親に言われて、ジョニーは何度も熊を遠くへ置いて来るのですが、すぐに戻って来てしまいます。残された手段は…。厳しい選択と幸せな結末。セピア色の絵が開拓時代のアメリカの雰囲気をよく表現しています。



(22×16)

## おおきなおおきなおいも

赤羽末吉作・絵  
福音館書店 1972年

幼稚園の芋掘り遠足が雨で延期となり、園児たちは「つままない」の大合唱。でも一週間たてば、お芋はもっと大きくなっているはず。子供たちは、とびきり大きなさつま芋の絵を描くことにします。紙を次々つないで描いたおおきなおおきなおいも！ 何ページにもわたるさつま芋の迫力！ お芋といっしょに子どもたちの空想もどんどんふくらみ、楽しい遊びが、次から次へと展開します。子どもたちの歓声や笑い声が聞こえてきそうな絵本です。



(26×21)

## おおきな きがほしい

佐藤さとる文 村上勉絵  
偕成社 1971年

大きな大きな木があるといいな、ねえ、お母さん…。かおるが空想をふくらませた木とはこんな素敵な木だったので。家族全員でやっと抱えられるような太い木。はしごをかけて登って行くと、洞穴や小屋があり、見晴らし台もあります。リスや小鳥とのふれあいや、四季折々の小屋の描写は具体的です。絵を追うだけで、かおるの空想がイメージ豊かに伝わります。子どもの頃、誰もが描く空想の世界。親子で楽しみながら、夢を広げられます。

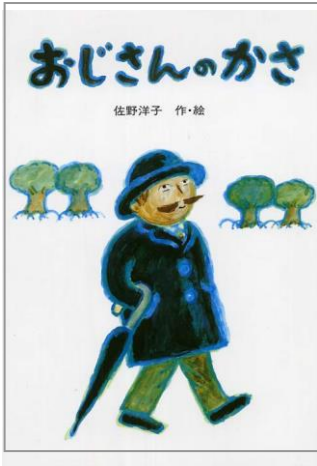


(21×17)

## おさらをあらわなかったおじさん

フィリス・クラジラフスキー文  
バーバラ・クーニー絵 光吉夏弥訳  
岩波書店 1978年(アメリカ1950)

一人暮らしのおじさんは、料理が好きで食べるのも大好き。ある晩、とてもお腹がすいたので、たくさん食べ、あとはくたびれてお皿はそのまま。それから、お皿はたまる一方。とうとう汚れたお皿が家中いっぱい。灰皿や植木鉢まで使い、きれいなものは何もなくなってしまいます。途方にくれたおじさんは、どうしたでしょう？ お話もおじさんの表情もユーモラスで、赤、緑、黒の三色を効果的に使った絵はしゃれています。



(31×22)

## おじさんのかさ

佐野洋子作

講談社 1992年

〈銀河社 1974年〉

おじさんはかさをとても大切にしています。ぬらすなんてとんでもない。雨が降ってもかささないで、雨宿りしたりひとのかさに入れてもらいます。ところがある日、「あめがふったらポンポロロン／あめがふったらピッチャンチャン」という子どもたちの歌を耳にします。それからおじさんは、かさに当たる雨音や水溜まりに踏み入る楽しさに目覚めます。文章はリズムカルで、青く太い線で縁取られた絵は、明るい透明感に満ちています。



(27×20)

## おっきちゃんとかっぱ

長谷川摂子作 降矢奈々絵

福音館書店 1994年

かっぱのガータロに連れられて川底へ行ったおっきちゃん。目にしたお祭のなんとにぎやかできれいなこと。水の外のことはすっかり忘れ何日も楽しく過ごします。ところがある日、人形が流れているのを見つけます。それはお母さんが作ってくれたものでした。うちに帰りたいと泣くおっきちゃんを人間の世界に戻すためにかっぱの古老が考えた方法とは？ 子どもの頃に聞いたおとぎ話に似ていながらも、独特な展開と絵が印象的です。

# おにぎり



平山英三ぶん 平山和子え

(22×21)

## おにぎり

平山英三文 平山和子絵  
福音館書店 1981年

手のひらに、水をつけて、塩をつけて、あつあつご飯をのせてぎゅっとにぎる。赤い梅干をうめて、またにぎってくるりと回す。のりを巻くと、おいしそうな三角おにぎりのできあがり。両手の動きも、あたたかい湯気も、おいしそうな匂いも感じられ、食べたい、つくりたいと思わせます。手とおにぎりだけが明るい水彩画で描かれた、ユニークな知識絵本です。子どもからおとなまで人気があります。



(31×22)

## オーラのたび

ドーリア夫妻作 吉田新一訳  
福音館書店 1983年(7/21 1932)

深い雪におおわれた森に住む少年オーラは、偶然行き合った行商人パールと旅に出ます。トナカイを飼うラップ人家族との出会い、漁師たちとの生活、雪国ならではの愉快的体験など、白夜の夏まで旅はつづきます。美しく厳しい自然と、そこに暮らす人々の生活が詳しく描かれ、オーラとともに壮大な旅が楽しめます。北欧特有の文様も描き込まれた石版画は、やわらかで温かく、ノルウェーのことがまるごとわかる絵本です。



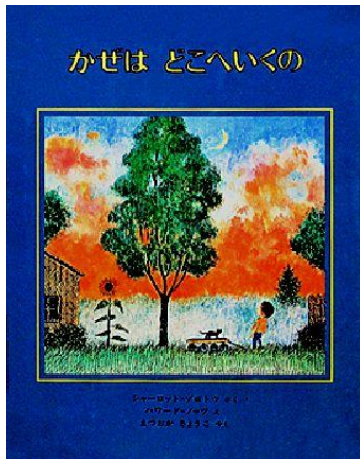
(22×18)

## おんなじおんなじ

多田ヒロシ作

こぐま社 1968年

こぶたのぶうとこうさぎのびよんは仲良のともだち。靴も帽子も服もおんなじ。「いいものもってるよ」と見せっこするものも、みんなおんなじ。おんなじ自動車でぶつかってできたこぶまでおんなじ。「あ・い・た・た」と泣くまでおんなじ。でも、逆立ちして、ポケットから転がり出たものは…。子どもの心をしっかりとらえる、線の太い無駄のない絵と言葉。遊びに発展させながら、親子でくりかえし楽しめる絵本です。ぶうとびよんの絵本は、ほかに『なにしてるなにしてる』『ぼくのだぼくのだ』などがあります。



(24×19)

## かぜはどこへいくの

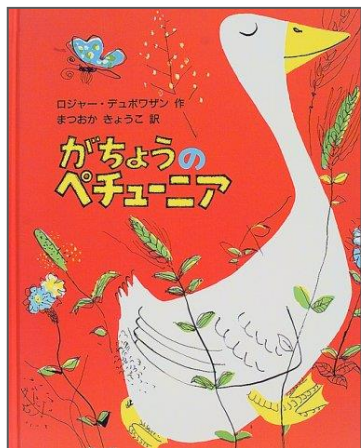
シャーロット・ソルトウ作

ハワード・ノッツ絵 松岡享子訳

偕成社 1981年(7月) 1975

一日の終わりに、小さな男の子が、どうして風はおしまいになるの？とたずねました。夜が始められるように、とお母さんは答えます。どこへ？ どうなる？ 男の子の疑問に答えながら、お母さんは終わりは次への始まりであることを教えます。「おしまいになっちゃうものは、なんにもないんだね」と安心する男の子。幼児が抱く疑問をしっかりと受けとめ、温かく、穏かに応えている本です。繊細な鉛筆画がしっとりとした情感を表しています。





(26×21)

## がちょうのペチューニア

ロジャー・デュボワザン作 松岡享子訳  
富山房 1999年(7月)1950)

捨った本をいつも持ち歩くがちょうのペチューニアは、得意になって他の動物たちの相談にのります。けれど結果は失敗ばかり。とうとう皆にけがをさせてしまいます。でもその大失敗の末に本は持ち歩くものではなく中身を頭や心に入れなくてはならないと気づいたのです。さあペチューニアの勉強が始まります。きっと、いつの日か皆を幸せにしてあげられるでしょう。知ったかぶりの末の大失敗や動物たちの表情がコミカルです。1978年に『おばかさんのペチューニア』の題で出ていたものです。他に『ペチューニアのたからもの』などがあります。



(29×22)

## 神の道化師

トミー・デ・パオラ作 湯浅フミエ訳  
ほるぷ出版 1980年(7月)1978)

みなし子の少年ジョバンニには得意な芸がありました。いろいろな物を空中に投げ、お手玉のようにまわすことができたのです。旅芸人一座で芸を磨き、富と名声も得ました。やがて年老い、無一文で故郷の教会にたどりついたのはクリスマスの日。たったひとつ残った芸を幼子イエスに捧げると…。民話を基に、すぐれた語りと絵で道化師の生涯を描いています。人生と信仰について深い感銘を与えてくれるこの絵本は、年令を問わずおすすめ。



(31×23)

## からすたろう

八島太郎文・絵

偕成社 1979年(7月) 1955)

ある山村で、一人の男の子が学校になじめず、皆からばかにされていました。六年生になった時、担任の先生はその子が虫や草木をよく知っていることに気づきます。学芸会で、男の子がカラスの鳴き声を上手に真似ると、村の人々ははじめて感心し、それからは親しみを込めて「からすたろう」と呼ぶようになりました。人々に認められることの喜び、大切さを描いた背景には、米国に移住した作者の望郷と恩師への思いが感じられます。



(31×23)

## きつねのホイティ

シビル・ウェッタシン八作 松岡享子訳

福音館書店 1994年

くいしんぼぎつねのホイティは、洗濯物を着て旅人に化け、まんまとおいしい晩御飯にありつきます。おかみさんたちがわざとだまされてくれたのに、それを知らないホイティが いい気になって「村の女はばかぞろい」なんて歌ったりしたから、さあ大変。怒ったおかみさんたちはホイティに一泡ふかせてやろうと、きらびやかな花嫁衣裳を着せて…。ユーモラスな歌、エキゾチックな風俗、スリランカの豊かな自然が印象的です。



(22×22)

## 木のうた

イエラ・マリ作

ほるぶ出版 1977年(イタリヤ 1975)

雪に覆われた大地にどっしりと立つ大木。春、若葉が芽吹き、冬眠のリスは目覚め、鳥は枝に巣を作ります。葉が繁り、花が咲き、赤く葉が染まり…。そして冬、全ての葉を落とし、また巡りくる春を待つのです。文字はないのに、緻密で美しい絵から葉のそよぐ音や鳥たちのざわめきまでもが聞こえてくるようです。一本の大木と小さな生き物たちの、季節の移り変わりの美しさと生命力が伝わってきます。質の高いグラフィック・アート絵本です。



(29×21)

## クリスマスまであと九日

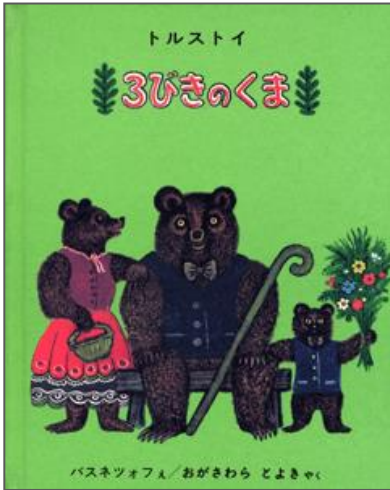
セシのボサダの日

マリー・ホール・エッツ&アウロラ・ラパスティダ作

田辺五十鈴訳

富山房 1974年(アメリカ 1959)

ボサダとはクリスマス前の9日間、每晚違う家で開く特別のパーティのこと。お菓子やおもちゃを入れた紙の張子のピニャタを庭につるし、割って楽しむのです。5才のセシは自分のための初めてのボサダに、大きな金の星のピニャタを準備します。そして待ちに待った当日…。幼い女の子の初体験への期待や興奮の様子が伝わってきます。墨で描かれた絵に、部分的な原色の彩色が美しく、メキシコの風俗習慣にも興味をそそられる絵本です。



(28×23)

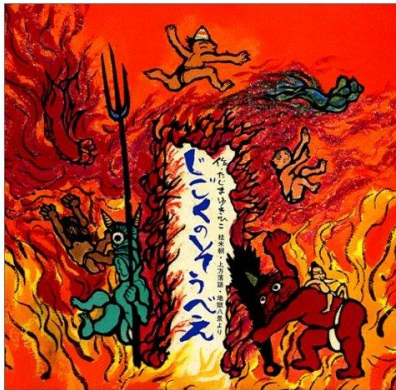
### 3びきのくま

トルストイ作 バスネツォフ絵

おがさわらとよき訳

福音館書店 1962年(1971年)

森で迷った女の子が見つけたのは、3びきのくまの家。クマの親子は散歩に出かけて留守でした。女の子は三つ並んだおわんのスープ、いす、ベッドを次々ためしたあげく、寝てしまいます。大きなクマ、中くらいのクマ、小さいクマの声が活字の大ききであらわされ、三回ずつの繰り返しがゆっくりていねいに語られています。おおらかなお話と、どっしりと素朴でどこかユーモラスな絵が、ロシアの風土を感じさせる楽しい絵本です。



(25×26)

### じごくのそうべえ

田島征彦作

童心社 1978年

桂米朝・上方落語・地獄八景より

軽業師のそうべえは綱渡りの最中に足を踏み外し、気がつくそこは三途の川へ続く道。山伏のふっかい、歯ぬきのしかい、医者のおくあんとともにえんま大王の前に引き出され、地獄に落とされます。糞尿地獄にじんどん鬼、熱湯の釜や針の山もなんのその。それぞれの特技を使ってさんざん暴れ回り、大王たちを手こずらせます。そしてとうとう…。大胆で力強い染絵は生命力あふれ、上方落語の軽妙な語り口も楽しく、大笑いできる絵本です。他に『そうべえごくらくへいく』『そうべえまっくろけのけ』があります。



(21×24)

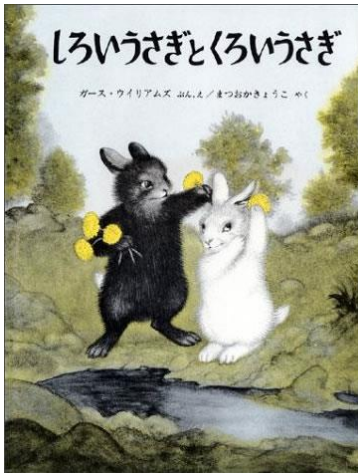
## しずくのぼうれん

マリア・テルリコフスカ作

ボフダン・ブテンコ絵 内田莉莎子訳

福音館書店 1969年（ホ・ラウト 1965）

ひとしずくの水がバケツからびしゃんととびだし、長い旅に出ます。きれい好きなしずくは、ほこりを落としに洗濯屋さんやお医者さんに行きますが、そこもとびだしてしまいます。雨、氷、川、つららなどつぎつぎに姿をかえながら旅をつづけますが、空にのぼったり、岩からころげ落ちたり、スリル満点。単純な線で描かれたしずくの手足の動きが生き生きとしています。冒険の旅は、水のサイクルです。お話としても楽しめる科学絵本です。



(32×24)

## しろいうさぎとくろいうさぎ

ガス・ウィリアムズ文

松岡享子訳

福音館書店 1965年（アムカ 1958）

白いうさぎと黒いうさぎはいつも一緒に遊びます。でも、そのうち黒いうさぎは考えこむことが多くなりました。いつまでも一緒にいられるようにと真剣に願っていたのです。それを知って、白いうさぎはいつまでもと誓います。人を愛するとはどういうことがわかりやすく描かれています。率直に愛を語ることに慣れていない日本の親には敬遠されがちですが、子どもの心にはまっすぐ響くようです。柔らかいタッチの精密な絵も楽しめます。



(31×24)

## すばらしいとき

ロバート・マックロスキー文・絵

渡辺茂男訳

福音館書店 1978年(アメリカ1957)

春から夏の終わりまでを両親と島で過ごす子どもたち。島を覆う雲が雨を呼び、子どもたちの上にも降り出す。早春の霧の朝、シダが芽を広げ、晴れば水がきらめく。夏の盛りには、子どもたちは海と戯れる。やがて風。そして嵐の予感。嵐は静かにやってきて海原をたたき、木を倒す。嵐が過ぎれば、島を去るとき。大人は子どもたちに、潮の香りをよく嗅いでおくようにいます。穏やかな絵と文章が自然の素晴らしさを引き立てています。



(25×26)

## せいめいのれきし

バーバリー・リー・バートン文・絵

石井桃子訳

岩波書店 1964年(アメリカ1962)

壮大な宇宙の中で地球の誕生を語るプロローグ。その地球上で誕生した生命の歴史が序幕の劇として展開されます。右ページは、客席から大舞台を見ているかのようです。左ページは、時の鎖の輪でつながれた絵で、生命の歴史を子どもにもわかりやすく伝えています。エピソードでは、未来への想像を膨らませてくれる配慮もされた詩情豊かな科学絵本です。次々と新しい発見があっても、この宇宙観は基本であり、変らぬ感動を与えてくれます。



(26×18)

## せかいのはてってどこですか？

アルビン・トゥレッセルト作  
ロジャー・デュボアザン絵 三木卓訳  
童話館出版 1995年（アガカ 1958）  
〈佑学社 1979年〉

井戸の中でひとりで暮らしていた蛙くんは、ここが世界のすべてだと満足していました。外のことはなにも知らなくても蛙くんは幸せでした。ある日、井戸の水が干涸びてしまったので、世界のはてを見に行こうと、井戸を出ます。そこで蛙くんが出会ったものは？ 原題はまさに「井の中の蛙」。広い世界のすばらしさを知りはじめた蛙くんの感動は、そのまま子どもの成長と重なりそうです。のびのびした筆づかいの絵がユーモラスです。



(23×27)

## ターちゃん と ペリカン

ドン・フリーマン作 西園寺祥子訳  
ほるぷ出版 1975年（アガカ 1961）

今年の夏も海辺にやって来たターちゃんは、仲良しのペリカンと再会しました。今年は初めて魚釣りをしようと浜辺の杭に腰掛け、ペリカンの魚とりを見学します。ところが潮が満ちてきて、浜辺にぬいでおいた新しい長靴を波にさらわれてしまいます。帰り道、砂山で待っていたペリカンが「ぐわあー！」と開けた口の中には…。刻々と変わっていく光と海の色が美しく、ターちゃんがペリカンに寄せる親しみが淡々と描かれています。



(26×24)

## 旅の絵本

安野光雅作

福音館書店 1977年

男が一人、ボートで岸に着き、馬を手に入れて旅をします。森を抜け、村々を通りすぎ、町に入ります。北ヨーロッパを思わせる家並みの中に紛れるように進む旅人。やや高い目線で、旅人を追いながら、細かく描き込まれた絵の中には、さまざまな人々の暮らしがあり、お祭りもあります。さりげなくちりばめられた名画や名作の場面や、だまし絵などを探すのもこの本の魅力の一つです。文章はありませんが、子どもから大人まで、それぞれの楽しみ方があるようです。ほかにイタリア、イギリス、アメリカを舞台とした、『旅の絵本』Ⅱ、Ⅲ、Ⅳが出ています。



(22×26)

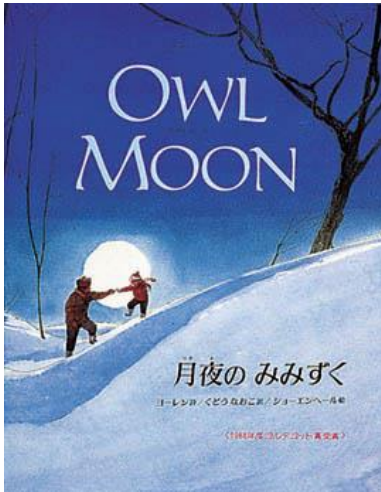
## ちびゴリラのちびちび

ルース・ボーンスタイン作 岩田みみ訳

ほるぷ出版 1978年(7月) 1976)

ちいさなかわいいゴリラの名前はちびちび。森の動物たちは、みんなちびちびが大好きです。生まれたその日から、誰からも無条件に愛されています。そんなある日、何かが起こります。大きくなりはじめたのです。それでもみんなは、ちびちびが大好きでした。幸せいっぱい表情は愛らしく、それを見つめる動物たちの瞳は、やさしく描かれています。まるごと自分が愛され、かけがえのない存在だと、子どもが実感できる心温まる絵本です。





(29×22)

## 月夜のみみずく

ジェイン・ヨーレン詩

ジョン・ショーエンヘル絵 工藤直子訳

偕成社 1989年(7月) 1987)

「とうさんといっしょに／こうやって でかける夜を／わたし ずっとずっと まったの」待ちに待ったみみずく探しの夜。厳冬の雪の森は、どこまでも静かに、黒々と続いています。月の光に輝く白い雪の中、父のあとを黙々と追いつける少女。やがて迎えるみみずくとの出会いは、野生との感動の交歓。父との特別な時間を少女のみずみずしい感性がよく伝えていきます。絵本の随所から感じられる森の清冽な空気、そして父娘の息遣いや鼓動。静かな臨場感に満ちた珠玉の一冊です。



(29×23)

## トリゴラス

長谷川集平作

文研出版 1978年

真夜中、空で「びゅわんびゅわん」音をたてているのは、怪獣トリゴラスに違いないと父親に告げる少年。凶暴なトリゴラスは、トリゴラスを吐き街を破壊していく。目指すはおるちゃんのマンション。壁をぶち壊し彼女をさらっていく。「よっしゃ、これでええ」強烈なタッチの絵と関西弁が、好きな人を捕まえたいという気持ちを効果的に表しています。単なる怪獣絵本を超え、幅広い年齢層に支持される一冊でしょう。



(20×27)

## とん ことり

筒井頼子作 林明子絵  
福音館書店 1986年

かなえの家の玄関で「とん ことり」と音がしました。見ると、郵便受けの下にすみれの花束があります。引越してきたばかりのかなえに、だれからかの贈りものです。その日から小さな贈りものが毎日とどくようになりました。たんぼぼ、手紙、おりがみの人形…。そして、かなえはついに贈りものの主の女の子と友だちになれたのです。柔らかな色合いのやさしい絵からも、小さな女の子らしい喜びや不安な気持ちが伝わってきます。



(13×13)

## なぞなぞえほん 1・2・3のまき

中川李枝子作 山脇百合子絵  
福音館書店 1988年

真四角なかわいらしい絵本を開くと「ちびでかるくて／なめられるけど／せかいじゅうに／てがみをはこぶ」と、なぞなぞの言葉。ウサギが手紙を持って走っている絵が描かれています。よく見ると、答えはちゃんと絵の中に…。見開きごとに、一つの「なぞなぞ」で構成されています。子どもや擬人化された動物が主人公の絵。リズムのある言葉を聞きながら絵を見て答えがわかるので、小さい子ども大きい子どもいっしょに楽しめるでしょう。3分冊になった言葉遊びの絵本です。



(22×27)

## にぐるまひいて

ドナルド・ホール文 バーバラ・クニー絵  
もきかずこ訳

ほるぶ出版 1980年(7月) 1979)

19世紀初めのアメリカの農村。十月、父さんは、家族みんなで一年間作り育てたものを全部荷車に積み込んで市場に出かけます。十日かかってボーツマスに着くと、品物を全部荷車や牛まで売り払い、必要なものを買って家路につきます。そして冬、父さんが帰って来た夜から、一家はまた新たな一年の仕事を始めるのです。季節の移り変わりと仕事ぶりが丹念に描かれた絵は美しく、豊かな自然の恵みと素朴で温かな生活が伝わってきます。



(25×24)

## はなのあなのはなし

柳生弦一郎作

福音館書店 1981年

はなのあな。いろいろな大きさや形がありますね。ほくとおじいちゃんのはなのあなをくらべると、おじいちゃんのほうが大きい。ほかの人の？ あなが1つの動物もいる。はなをつまむと…はな血が出ると…。単純で大胆なイラストが、はなのあなのはたらきや、構造を親しみやすく、分かりやすく教えてくれます。ところどころに興味をそそるおもしろい言葉もでてきて、楽しみながら学べる科学絵本です。

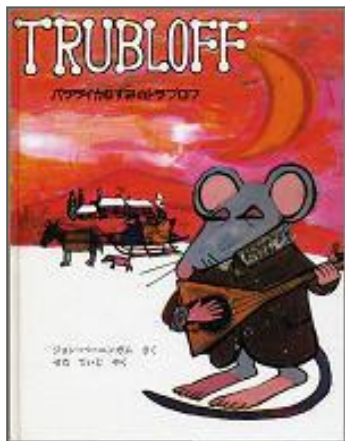


(21×17)

## はなのすきなうし

マンロー・リーフ文 ロバート・ローソン絵  
光吉夏弥訳  
岩波書店 1954年（アメリカ1936）

フェルジナンドは小さいときから、木の下に座って、静かに花の匂いをかいでいるのが好きな牛でした。ほかの牛たちは、強くなって闘牛に出るのが一番の望みで、暴れ回っているのというのに。ところがフェルジナンドはひよんなことから、猛牛と勘違いされてマドリードに連れていかれます。華々しい大闘牛場で、みんなの期待をよそにフェルジナンドは…。大人にも楽しめるストーリーと、線の太い力強いペン画がユーモラスです。



(28×22)

## バラライカねずみのトラブロフ

ジョン・バーニング作 瀬田貞二訳  
童話館出版 1998年（イギリス1964）  
〈ほるぶ出版 1976年〉

ねずみのトラブロフは音楽が大好き。大工ねずみのおじいさんに、バラライカというギターに似た楽器を作ってもらいます。腕のいい楽士になりたくて、ジブシーたちといっしょに内緒で旅にでかけました。心配したおかさんは病気になり、妹が探しに出かけます。家に戻ってからは兄弟たちとバンドを組み、酒場で演奏をするようになりました。力強い線と色が、雪の降り積もるヨーロッパの大地の、寒い雰囲気をよくだしています。



(26×28)

## ヒマラヤのふえ

A・ラマチャンドラン作・絵 木島始訳  
木城えほんの郷 2003年  
＜福音館書店 1976年＞

ヒマラヤの谷に住む若い農夫ラムールと妻は、働き者ですが貧乏でした。ある晩、家に泊めた老人が宿代がわりに置いていった竹笛を吹くと、荒地は花園に変わりました。美しい笛の音は夜空にも響き、その音色のとりになつた三つ星の企てで蜂に変えられたラムール。嘆いた妻は、老人の知恵を借りて夫を助け出します。曲線を強調して、大胆にデザイン化された構図と色彩が、インドの昔話とよく溶け合って、不思議な美しさがあります。



(21×23)

## びゅんびゅんごまがまわったら

宮川ひろ文 林明子絵  
童心社 1982年

こうすけたちは、回せるようになったびゅんびゅんごまを持って意気揚々と校長室に入ります。ところが校長先生ときたら、また一つこまをふやして回しています。遊び場を返してほしいという子どもたちの思いから始まったびゅんびゅんごま対決。懸命にこまを回す子どもたちの姿と彼らとのやりとりを心から楽しむあまのじゃく先生の魅力があられます。たんぼぼびなやさや笛など、子どもたちが紹介する季節の草花遊びも楽しい絵本です。



(29×22)

## ひよこのかずはかぞえるな

イングリとエドガー・パーリン・ドーレア作  
瀬田貞二訳  
福音館書店 1978年(7月) 1943

めんどりが卵をうみました。太ったおばさんは喜んで町へ売りに出かけます。そして道々捕らぬ狸の皮算用。卵を売ってひよこをふやし、お金を儲けて贅沢三昧、そして結婚…。鼻高々になって卵のかごを額に乗せたとたん卵は地面にびしゃん。卵といっしょに夢までおじゃん。でもおばさんは平気平気、まだ家もあるし、犬も猫も、毎日卵を産むめんどりもいますから。ユーモラスな絵と語り口が魅力的なお話です。

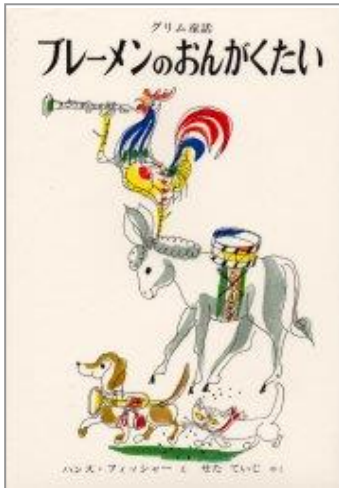


(28×23)

## フレデリック

レオ・レオ二作 谷川俊太郎訳  
好学社 1969年(7月) 1967

冬に備えて野ねずみたちは、木の実や小麦などをせっせと石垣の家の中に運んでいます。ところがフレデリックだけは、じっとして働きません。なぜ? と問う仲間に、日の光や色や言葉を集めていると答えます。雪にとじ込められ、食べ物も尽き、寒さの中で元気をなくした仲間…。フレデリックは集めたものを「詩」という言葉にして皆の心に届けました。シンプルな絵の野ねずみと、簡潔な文章が魅力的な絵本です。



(31×22)

## ブレーメンのおんがくたい

グリム童話

ハンス・フィッシャー 絵 瀬田貞二 訳  
福音館書店 1964年 (スズ 1948)

年にとって働けなくなったロバは、ブレーメンの町の音楽隊に入ろうと飼主の家を出ます。イヌ、ネコ、オンドリも加わって歩いていくと森の中に灯が一つ。泥棒の家でした。動物たちは一計を案じ、お互いの上に乗れり、一斉に鳴き声をあげて、家に飛び込みます。驚いて逃げ出した泥棒たち。そして4匹は…。一筆書きのような動物たちの表情が楽しく、アクセントカラーに使われた明るい色がおしゃれ。スイスの画家が描いたグリム童話です。



(21×21)

## ぼく、お月さまとはなしたよ

フランク・アッシュ 絵と文 山口文生 訳  
評論社 1985年 (アメリカ 1982)

お月さまにお誕生日の贈り物をしたいと思ったクマくんが、山の頂上から話しかけたら声が返ってきました。実はこだまなのですが、お月さまの返事だと思いこんだクマくん。お月さまに帽子を贈ったり、自分ももらったと勘違いしたり、せっかくの帽子をなくしちゃったり。いろいろあっても、お月さまが大好きという気持ちは変わりません。クマくんの一途さとかわいらしさが、シンプルで温かい絵と素直な文章で表現されています。他に「かじってみたいなお月さま」などがあります。



(27×31)

## ぼくらの地図旅行

那須正幹文 西村繁男絵  
福音館書店 1989年

小学校5年生の男の子二人が、歩いて岬の灯台まで行くことになりました。頼りは地図と磁石だけです。二股道や港で迷ったり、時にはけんかもありますが二人は力を合わせて歩き続けます。無事につけるでしょうか…。見下ろす構図で描かれた風景には、道や田畑や家々だけでなく、人々の働く姿や暮らしぶりが見てとれます。同じページの地図と照らし合わせて見ているうちに、地図の読み方や記号もわかるようになります。



(20×27)

## まあちゃんのながいかみ

高楼方子作  
福音館書店 1989年

まあちゃんは、おかっぱあたまの女の子。そのまあちゃんが、髪をのばすとね…と空想をふくらませていくお話です。橋の上からおさげをたらして魚を釣ったり、髪にくるまって眠ったり、そしてパーマをかければ、まあちゃんの髪はいろいろな動物が住む森に変身。ページをめくるたび、次はどんなすてきなことがまっているのだろう、とワクワクさせてくれる絵本です。細かくて明るい絵が、まあちゃんのお話を何倍にも楽しませてくれます。





(23×25)

## マイク・マリガンと スチーム・ショベル

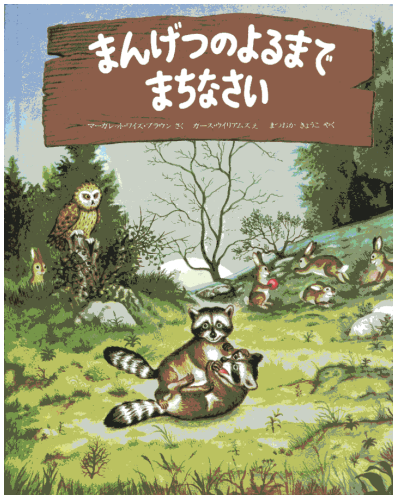
バージニア・リー・バートン文・絵

石井桃子訳

童話館 1995年(アメリカ1939)

<福音館書店 1978年>

マイクとスチーム・ショベルのメアリは多くのひとたちと一緒に、運河を掘ったり山を切り開いたりしました。ところが新式のショベルがでてくると仕事がなくなります。そのとき町で市役所を建てる計画があり、地下室を掘らせてもらいます。日没までにやっと終わるのですが、マイクとメアリは掘った穴から出られなくなって…。動きのある鮮やかな絵と、人の温かさを感じさせる話の展開が、子どもたちにも忘れがたいものになるでしょう。



(26×21)

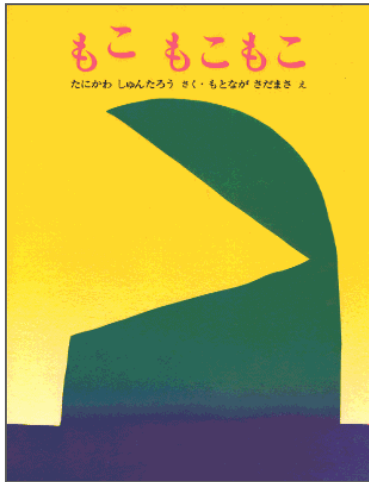
## まんげつ の よるまで まちなさい

マーガレット・ワイズ・ブラウン作

ガース・ウィリアムズ絵 松岡享子訳

ペンギン社 1978年(アメリカ1948)

あらいぐまのぼうやはまだ夜を見たことはありません。夜を見たいというぼうやに、おかあさんは満月の夜まで待ちなさいと言います。夜がどんなに暗いのか、月がどんなに大きいのか、ぼうやが聞きたびにおかあさんは優しく説明し、歌ってくれます。ぼうやの胸が期待ではちきれそうになった時、とうとう満月の夜が来ました！ 待つ楽しみと夢がかなう幸せ、それを見守る母親の愛情が、ソフトなペン画と心地よい文章で描かれています。



(29×23)

## もこもこもこ

谷川俊太郎作 元永定正絵  
文研出版 1977年

「しーん」で広がった地平線に、「もこ」と何かもりあがってきました。思いがけない色と形が、ことばといっしょに動き出します。

「によきによき／ぱく／もぐもぐ…」そのダイナミックで意表をつく展開は、何度見ても飽きません。終わりに「しーん」再び「もこ」またはじめから読み返したくなる不思議な魅力があります。読み方を工夫すれば、さらに楽しめます。へんてこりんで、おもしろくて、子どもたちの大好きな絵本です。



(19×19)

## やさいのおなか

きうちかつ作・絵  
福音館書店 1997年

「これなあに」そこには、ドカーンと大きな野菜のシルエット。ページをめくると、色あざやかな野菜の断面が目にとびこんできます。ネギ、レンコン、ピーマン、タケノコ…。何気なく食べている野菜の断面が、こんなにおもしろい形だったのだと気づかされます。つぎはどんな野菜かな？ いくつ当てることができるかな？ と問答しながら、想像する楽しさと、野菜を当てるおもしろさで、子どもから大人まで幅広く人気があります。

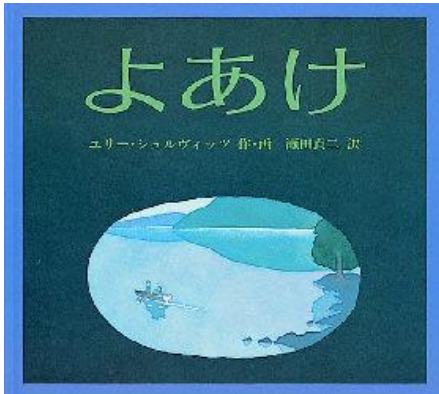


(21×23)

## やまなしもぎ

平野直再話 太田大八画  
福音館書店 1977年

病気のお母さんにやまなしを食べさせようと三人兄弟が順に山奥にでかけます。太郎と次郎は出会った婆さまの教えにも、笹や鳥の忠告にも耳をかさず、沼の主にのまれてしまいます。三郎は婆さまの頼みをかなえ、笹や梨の木の声に従ってやまなしを手に入れます。明快なすじと、山場の盛り上がりが特徴で、ヨーロッパの昔話によくある三兄弟の冒険物語と共通する魅力をもっています。方言のきいた文と彩墨画が味わいをさらに深めています。

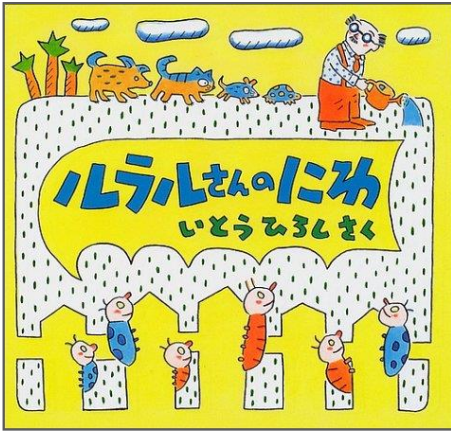


(24×26)

## よあけ

ユリー・シュルヴィッツ作・画  
瀬田貞二訳  
福音館書店 1977年 (原刊1974)

暗闇に目が慣れるように広がっていく視界。目を凝らせば、そこは夜の湖。木の下には毛布にくるまる老人と孫、黒々と静まる山と湖。えんえんと続くかに思える夜の暗闇の中で、風が動き、光が変わり始める。そして訪れる鮮やかなよあけ。見開きにあふれる光と色は、驚きと喜びで迎えられることでしょう。詩情豊かな短い文と巧みな水彩で描き分けられた様々な闇が、深夜から早朝にかけての時間の経過を見事に伝えてくれます。



(24×25)

## ルラルさんのにわ

いとうひろし作

ほるぷ出版 1990年

ルラルさんの大切な芝生の庭、入ってくるものはみんな追い払います。ところがある朝、みどりの芝生にワニがごろり。ワニは手まねきして、いっしょに寝そべろうと誘います。おなかをちくちく芝生にさされ、その気持ち良さにうっとりするルラルさん。それから、庭に動物たちがたくさん集まってきて…。へんくつおじさんだったルラルさんの変身ぶりに、思わず顔がほころびます。明るくユーモラスな絵が楽しい、心あたたまる一冊です。他に『ルラルさんのごちそう』『ルラルさんのバイオリン』があります。



(25×22)

## わたし

谷川俊太郎文 長新太絵

福音館書店 1976年

やまぐちみちこ5才。主人公の「わたし」です。その「わたし」は、男の子から見ると女の子、宇宙人から見ると地球人。また、レストランへいくとおじょうさん、おもちゃ屋さんへいくとお客さん…。相手や場所によって、同じひとりの「わたし」は見方も、呼び方も変わるのです。ふだんは気にもとめない、あたりまえのことを「わたし」と人とのつながりを通して、楽しみながらおしえてくれる絵本です。



